熊本大学
担当部署連絡先：研究推進課　科研費担当
096-342-3186
作成日：2020年2月28日
更新日：―

科研費 KAKENHI

永青文庫細川家資料の総合的解析による日本史研究の拠点形成と社会発信

研究者所属・職名：永青文庫研究センター・教授

ふりがな　いなば　つぐはる
氏名：　稲葉　継陽

主な採択課題：
- 基盤研究(B)「近世初期永青文庫細川家文書の総合的解析による藩政確立過程の研究」(2015-2018)
- 基盤研究(A)「永青文庫細川家資料の総合的解析による大名家資料学の構築」(2010-2014)

分野：　日本中世史、近世史

キーワード：永青文庫細川家資料、大名家資料学、初期藩政史料、戦国時代、日本近世社会

課題

●研究の背景・目的

日本近世における基本的な政治単位であった大名家には、政治、経済、行政、教育、社会運動、社会思想、科学、建築、芸術文化に至るまでの、当該社会の人間活動のほぼ全域に関わる史資料が作成・蓄積されていた。本研究は、代表的大名家資料群とされながら全体の分析がなされてこなかった「永青文庫細川家資料」(熊本大学附属図書館寄託、約60,000点)の総目録を作成して、その全容を明らかにする。併せて、17世紀前半までの藩政史料群の細目録を作成することを通じて、近世大名領国における藩政の形成過程を解明し、成果を社会一般に発信することをも目的とする。

●研究の手法

熊本大学は本研究を推進する組織として「永青文庫研究センター」を設置。資料一点ごとの詳細調書を作成し、そのデータを画像データとともに蓄積して総目録に編成。この基礎研究は当該史料群の多様性と厖大さとに配慮しながら、年次ごとの目標計画を設定して推進した。調書作成は同センターのスタッフに熊本大学の学生・大学院生も作業に加えることでプロジェクトに教育的機能をも持たせ、他機関の研究者の参加を得ることで、資料の価値評価の客観性を担保した。

図1　調書作成の様子

熊本大学
担当部署連絡先：研究推進課　科研費担当
096-342-3186
作成日：2020年2月28日
更新日：―

科研費 KAKENHI

永青文庫細川家資料の総合的解析による日本史研究の拠点形成と社会発信

研究成果

●永青文庫細川家資料の全容解明、研究成果を出版物で発信
基礎研究の過程で得られた知見を『永青文庫叢書』として刊行しながら、永青文庫細川家資料群の総目録を完成させ、全貌を解明した。
さらに、藩政確立期の史料群にかかる基礎研究の成果を一般向けにまとめた著書も出版した。
・『熊本大学寄託永青文庫資料 総目録』(収録資料約59,000点 全4冊、2015年)
・『永青文庫叢書 細川家文書』(全5冊、吉川弘文館、2010～2014年)
・稲葉継陽著『細川忠利 ポスト戦国世代の国づくり』(吉川弘文館、2018年)

●永青文庫資料の重要文化財への指定
本研究の成果である「永青文庫資料総目録デジタルデータ」が活用され、重文への指定が実現した。
・細川家文書(266点)の国重要文化財への指定(2013年)
・細川忠興・忠利発給文書群(2,363点)の熊本県重要文化財への指定(2018年)

●関連研究機関やメディアとの協力による社会への発信
・熊本県立美術館や財団法人永青文庫等での展覧会の共催
　永青文庫細川家資料の調査・研究成果を反映（細川ガラシャ展、細川家と「天下泰平」展）
・「くりぃむしちゅーの歴史新発見 信長59通の手紙を解読せよ」(日テレ系全国放送、2015年)
　永青文庫所蔵織田信長文書の研究過程とその成果をわかりやすく提示した特別番組

地道な調査が結実
熊本大永青文庫研究センター
「細川家文書」国重文指定へ

図4 国指定の新聞記事

図2 永青文庫資料総目録

図3 永青文庫叢書

今後の展望

熊本大学は永青文庫資料の他にも第一家老松井家の文書群等厖大な貴重資料を所蔵、その基礎研究を展開
・現在、熊本大学所蔵松井家文書の目録作成事業を推進中
　→大名家文書群と家老文書群 合計約10万点をリンクして活用できる唯一無二のシステムの構築へ
・成果は「永青文庫叢書」シリーズや一般読書人向け出版物、それに熊本大学のwebサイトを通じて随時公開
・展覧会の共催やシンポジウム・講演会を通じて研究成果を市民に続々と直接発信
・センターの研究成果を反映させた論文が英語圏の日本通史『Cambridge History of Japan』に掲載予定

図5 展覧会の共催

図6 第二期永青文庫叢書